
名探偵コナン「帝丹高校ライブ事件」

オーストリア航空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン「帝丹高校ライブ事件」

【Nコード】

N1260J

【作者名】

オーストリア航空

【あらすじ】

桜が丘高校軽音楽部の5人がライブをやるために帝丹高校に行く途中、唯が行方不明になった。一方、探偵団と遊んでいた灰原哀も米花公園で行方不明に。この2つの真相をコナン・律・漣・紬・梓が暴く。

登場人物（けいおん！）

- 1 平沢唯（桜が丘高校3年生 ギター担当）
2 田井中律（桜が丘高校3年生 ドラム担当）
3 秋山澪（桜が丘高校3年生 ベース担当）
4 琴吹紬（桜が丘高校3年生 キーボード担当）
5 中野梓（桜が丘高校2年生 ギター担当）
6 平沢憂（桜が丘高校2年生 生徒会長）
7 真鍋和（桜が丘高校3年生 山中さわ子（桜が丘高校教諭 軽音楽部顧問）の妹）
8 山中さわ子（桜が丘高校2年生 憂・梓の友人）
9 斎藤執事（琴吹家執事）
10 鈴木純（桜が丘高校2年生 憂・梓の友人）
11 校長（桜が丘高校校長）

登場人物（名探偵コナン）

1 江戸川コナン（帝丹小学校2年生）

2 毛利蘭（帝丹高校3年生）

3 灰原哀（帝丹小学校2年生）

4 阿笠博士（53歳 工学部博士号取得）

5 吉田歩

美（帝丹小学校2年生）

6 小嶋元太（帝丹小学校2年生）

7 円谷光彦（帝丹小学校2年生）

8 佐藤美和子（警視庁捜査一課警部補）

9

千葉一伸（警視庁捜査一課巡査）

10 白鳥任三郎（警視庁捜査一課警部）

11 小林

澄子（帝丹小学校教諭）

12 工藤優作（小説家）

13 工藤有希子（元女優 優作の妻）

14 榎本梓（

喫茶店「ポアロ」ウェイトレス）

15 沖矢昴（大学院生）

？ 彼は黒の組織とは無関係であることがわかった時の設定である。

01 校外ライブ決定！

7月のある日、軽音楽部部长の田井中律は顧問の山中さわ子に呼ばれた。さわ子「今度、あなたたち校外ライブをやることになったの。」

律「校外ライブ!?・・・ちよつとそれマジで言ってるの?さわちゃん。」さわ子「ええそうよ。あなたたちの評判を聞いて、ぜひ、ライブをやってほしいって言う所があらわれたのよ。」

律「で、どこでやるんだよ。」
さわ子「帝丹高校よ。」

律「(ある意味校外じゃないじゃん・・・。)」部室に戻った律は、その事を部員である、唯・漣・紬・梓に伝えた。

梓「先輩、それは、私達のことが多いの人に知られたことになりましたよね。目標(武道館ライブ)に一步前進ですね。」唯

「りっちゃん、すごい。」
紬「楽しみですわ。」
漣「で、律。帝丹高校はどこにあるか知ってるの?」

律「さあ?」
漣「ボコツ。」

律「いてー!。」
漣「律、そのくらいのこと知りなさい。帝丹高校は米花町にあるの。米花町はここからだと50Km以上離れているわよ。」
律「50Kmか・・・50Km!?それって遠くね。ドラム持つてくの大変じゃん。」

漣「米花町に電車で行く場合、農協台と帝都で乗り換えだから、時間は2時間半ぐらいね。」
律「2時間半!?それってかかり

すぎねえ。バスで行こうぜ。」
唯「そうだよ。漣ちゃん。」
漣「待って、今調べるから。」

(10分後)
漣「うー

ん、桜が丘高校前から帝丹高校前までバスで行けないことはないんだけど、それだと、乗り換えが9回、時間も4時間以上かかるからまだ電車の方がマシね。」
律「ムギ、お前の父親、タクシー会社経営してない。」
紬「ごめんなさい。さす

がにタクシー会社までは経営してないの。」 律「だよな。」

紬「ちよつと待つてください。」

唯・律・

漣・梓「？」

(15分後)

紬「今、電話したんですけど、叔父(父親の兄)様が運送会社を経営していて、楽器の運搬のみでしたら良いですって。」 律「本当か？」 漣「じゃあ、唯のギター以

外の楽器を紬の叔父さんに運んでもらうことにして、私達は電車で行こう。」 律「なんで唯のギターだけ運ばない

んだよ？」

漣「ほら、唯はいつもギー太を^{ギター}手放さないじゃない。もし、唯のギターも一緒に運んだら、唯が虚脱状態になるじゃない。」

律「ああ、そうか。」 唯「漣ちゃん、ありがとう。」

梓「先輩、聞き忘れましたけど、

律「丁度2週間後の18時、みんなそれ

までに気合いを入れて頑張ろうぜ！」 唯・漣・紬・梓「おー」

とその時、部室に唯の友人である桜が丘高校の生徒会長の真鍋和が入ってきた。

和「その時はちゃんと外部活動届出してね。」 律は「分かった」と言った。しかし、律は

またも忘れてしまい、結局、届を出さずにライブに行ってしまった。

02 ライブ2週間前(前書き)

言い忘れましたが、名探偵コナンの主要登場人物で未登場なのは、小五郎、英理、園子、目暮警部、高木刑事と言いましたが、他にも、服部平次、遠山和葉、FBI(ジョディ、ジエームスなど)、黒の組織(ジン、ウォッカ、ベルモットなど)も一切登場しません。

02 ライブ2週間前

その日の夜、唯は、妹の憂にその事を伝えた。 憂「へー、律さん達帝丹高校でライブやることになったんだ。すごいよお姉ちゃん。」
唯「えへへ。憂すごいでしょう。」

憂「帝丹高校のOB・OGには、私立探偵で、「眠りの小五郎」って世間から呼ばれている、毛利小五郎さんや妃法律事務所をやっている妃英理さん、それに、「闇のバロン」の生みの親の推理小説家工藤優作さんの妻である、元女優の工藤有希子さんがいるよ。」

唯「帝丹高校ってかなり有名な人が卒業しているんだね。」
憂「そうだね。」 唯「よし、そんな有名な人が卒業している帝丹高校に素晴らしいライブだったって言われるように私もギターがんばらなくちゃ。」 憂「お姉ちゃんがんばって！」

一方、その頃、探偵団と共に博士ん家に泊まり込みでゲームをしていたコナンは コナン「へっ!? 今度、ライブをみんなで見に行こうって？」
元太「おう。再来週な帝丹高校になどっかのグループが来てな、ライブをやってくれるらしいぜ。」

コナン「おい！元太。帝丹高校でライブやるんだったら、帝丹高校の生徒しかみれないだろう。俺らはまだ小学生だ。見れるわけないだろう。」
光彦「違いますよ、コナン君。今回のライブは一般解放してますから、誰でも行けますよ。」 コナン「けどな・・・」 歩美「もちろんコナン君もライブいくよね。」 哀「まあ、音痴で音楽関連にはまるで興味を示さない誰かさんにライブなんてつまらないでしょうけど。」 コナン「うるせーな。灰原。」

哀「ところで、ライブをやるのは、どこの、何ていうグループ名なの？」 光彦「確か、放課後ティータイムと言うグループ名で、高校の軽音楽部で結成されているそうです。高校の

名前は桜が丘高校だったと思います。「コナン」桜が丘高校？聞いたことないな。灰原、知ってるか？」

哀「いいえ、全く知らないわ。それにしてももの知りのあなたが音楽以外のことで知らないことがあるなんて意外だわ。」

コナン「こいつ、マジかわいくねえ。」

しばらくして、博士宅の隣に住んでいる大学院生の沖矢昴さんがやって来た。

灰原「あら、沖矢さんこんばんわ。」

昴「こんばんわ。みんなに夜食を作ってきたけど、食べるかい？」

光彦・歩美「ありがとうございます。」

元太はありがとうの挨拶もせず、早速夜食を食べ始めた。

昴「ところで、さっきから何の話をしているんだい？」

コナン「あ、実はね、・・・」

コナンはライブのことを昴に話した。

昴「なるほど、ライブか。」

光彦「沖矢さんもライブに行きますよね？」

昴「ごめんね、その日は大学で午前中は講義があって、午後からは泊まり込みで研究をする必要があるんだ。」

コナン「（良かった、沖矢さんが行けなくて、もし、行くな

んて言ったら行きたくない俺の立場が不利なるからな。）

少しして、昴は帰っていった。昴が出たのと同時に別室のパソコンでメールをやっていた博士が入ってきた。

博士「今、話を聞いてただけの、今度、帝丹高校で一般解放のライブをやるんじゃない？」

光彦「はいそうです。」

博士「なら、わしも行く。」

コナン「えーっ。」

博士「ん？どうしたんじゃない？」

コナン「どうしたんじゃない？じゃねーよ。博士、ライブなんか興味ねーだろ。」

博士「まあ、そうじゃが、ふと、わしもライブが見て見たくなくなっただけ。」

それに、ライブをやるのは桜が丘高校の軽音楽部じゃあ？」

光彦「はい、そうですけど。」

博士「実はな、桜が丘高校にな、わしの先輩がいての、もしかしたら来てるかもしれないから、会いたいと思ってるの。」

コナン「なるほど、」

光彦「だと、」

ライブ行くのは、賛成5、反対1ですか。」

歩美

「これで私達の方が有利になったね。」 元太「コナン、おまえにもう勝ち目はないぞ。」 コナン「うったく。わかったよ。いきやいいんだろ。」

コナンは渋々行くことに応じた。

03 ライブ当日

ライブ当日の朝、憂は朝食が出来たので、唯を起こしに部屋に入った。いつもなら部屋に入った時にはまだ寝ていて憂が起こさないと起きないのだが、今日はいつもとは違い、唯は既に起きて制服に着替え、ギターの練習をしていたのである。唯「おはよー。憂。」

憂「お姉ちゃんどうしたの？いつもならまだ寝ているのに。」

唯「いやー。なんかライブのことを考えたら

朝早く目が覚めちゃって・・・」

憂「お姉ち

ゃん、朝ごはんが出来たから一緒に食べよう。」

唯

「うん。」

憂は唯に心配かけないように明るくふるまったが、しかし、心の中では「なんか嫌な予感がする。」と思った。憂の思った通り約数時間後その予感が的中する。その頃、

朝食を食べていたコナンは、蘭に話かけられた。その頃、朝食を食べていたコナンは、蘭に話かけられた。その頃、朝食を食

蘭「ねえ、

コナン君。今日帝丹高校でライブがあるんだけど、一緒に観に行かない？」

コナン「ライブって放課後ティータイムとかって言うグループがやるんでしょ？」

蘭「そうよ。

コナン君。」

コナン「ごめんなさい。蘭ね

えちゃん。そのライブは博士達と行くから。」

蘭「そう。でも、どうしよう。お父さんはヨーコちゃんのコンサートに行っちゃってないし、お母さんは今日は外せない仕事があるって言うってたし、園子は旅行に行っちゃってるし、瑛祐君はアメリカに行っちゃったから。」

コナン「じゃあ、

蘭ねえちゃん一人でいけば？」

蘭「一人じゃ心細いのよ。ライブは18時〜20時だから、その後の帰り道でストーカーや痴漢に襲われたら嫌だし、もしかしたらお化けが出るかもしれないし。」

コナン「(ぜってー出ねえよ。お化けに怖がるなんて小学生かよ。第一、ストーカーや痴漢に襲われたって蘭の空手の方が

恐いから。() じゃあさー、蘭ねえちゃんも博士達と行く？それなら何にも怖くないでしょ。」

コナン君。じゃあそうしよう。」 コナン「(ハハハ・・・)」

その2時間後の午前9時過ぎ、桜が丘高校の最寄駅で唯・漣・紬・梓は気を揉んでいた。律がまだ来ていなかった。

唯「りっちゃん遅いねえ。」

漣「ーったく。何やってんだよ？あいつは。」

梓「先輩、今、9時9分ですよ。発車時刻は9時15分ですからあと6分しかありませんよ。」

漣「仕方ない。律がもし、発車時刻前に来なかつたらおいていこう。」 と丁度その時、

律「みんな、遅れてごめん。」 律が到着した。

漣「遅せーぞ。」 梓「先輩、後、何分で発車だと思ってるんですか？」 律「いやー、支度に手間取っちゃって。」

漣と梓に怒られるのはいつものことだった。

唯「いい加減にしてよ!!!りっちゃん。」 ところが

今回は唯にまで怒られた。唯が怒ったことは、律ばかりではなく、漣、紬、梓までもが驚いた。 漣「どう

したんだ？唯。いつもならそんなことでは怒らないのに」

唯「ごめんなさい。私、今日はなんかライブの練習時間のこととが気になってて、なかなか来ないりっちゃんのことイラってきちゃったの。」 漣「でも、唯はいつもギー太とムギのケーキのことしか考えてないんじゃない？」

梓「そんなことより、先輩、そろそろホームに行かないとまずいですよ。発車まであと3分切りましたよ。」

紬 「あら、本当ですね。急ぎましょう。」 桜が丘高校

軽音楽部5人は間一髪で、電車に乗り込み米花町に向かった。

電車に間一髪で乗り込んだ桜が丘高校軽音楽部の5人は後ろから2両目の中央付近に座っていた。この車両には5人の他に、眼鏡を掛けた若いサラリーマンと80歳ぐらいの小豆色の着物を着たお婆さんが乗っているだけだった。そのため、律は漣とふざけており、漣はそれに突っ込む、紬もそれを見て微笑ましそうに見ていた。それはいつもかわらないことだった。しかし、唯は違った。いつもなら律と一緒にふざけて、漣に突っ込まれるのに、今回は唯はライブで歌う歌の歌詞を確認したり歌の順番を確認にするなど、いつもの唯なら見られない光景だ。又、梓に会うと必ず「あずにゃん」と呼ぶのに、今日は一度も呼ばれていない。

梓「唯先輩が部活に熱心になったのはうれいけど、でもなんか先輩らしくないな。第一、私に今日は一度も「あずにゃん」って呼ばれていないじゃないですか。やっぱり唯先輩なんか変です。唯先輩に「どうしてこんなに部活熱心になっんですか？」きいてみよう。」と聞こうとしたと同時に梓は睡魔に襲われそのまま眠ってしまった。しばらくして

漣「・・・梓。・・・梓。」

梓「・・・はつ。先輩。」

漣「乗り換えだぞ。」 梓が目覚めて見

て見ると。唯、律、紬は既に電車を降りホームに立っていて、電車の中にいたのは梓と漣だけだった。この列車は当駅（農協台）が終点ではなく、更に北に8駅行ったあたりが終点で、発車まであと30秒を切っていた。漣と梓は慌てて電車から降りた。漣「危ない、危ない。乗り過ぎすところだった。」梓「次は帝都で乗り換えですね。」

律「その予定だったけど、その必要はないぜ。」唯

「りっちゃん、どうして？」 律「反対側のホーム

に停まっている列車の停車駅を見て見なよ。」 律の言われた通りに停車駅を見て見ると、【停車駅 東農協台、内海、谷嶋、土

岡、南大学前、街屋橋、小原、堂通、帝都、西杯戸、緑台、米花、
終点賢橋】

しで米花に行けるのか。」

ないの？」

漣「う、うるさい。私だつて鉄子じゃないんだ

から、そんなことまでわかるわけないでしょ。」

！漣は成績優秀だけど、地理は苦手だもんな。この前のテストなん

か平均78点に対して、61・・・」

漣「ボコツ。」

律「いて。」

漣「そろそろ発車みたいだから早く乗り

込もう。」

5人は今度は余裕をもって列車

に乗り込んだ。ただ、今度の列車は、がらがらだった先程の列車と
は違いほぼ満員であった。5人は混雑した列車の中でようやく1カ
所のボックスシートを見つけた。しかし、そのシートは4人掛けで
律だけ別のボックスシートに相席で座った。5人が座って数分後に
列車は出発した。律と紬は出発した直後に寝てしまった。漣はライ
ブで歌う歌の順番を確認している。唯はライブで歌う歌（ふわふわ
時間）の歌詞を見ている。梓は唯の異様な光景をずっと見続けてい
る。唯は梓がずっと唯を見続けている行動に「ほえ？」と思つたが、
結局何も言わなかった。それから15分ぐらいして唯は寝てしまつ
た。唯が眠った直後梓は漣に話かけられた。

・・梓。」

梓「先輩何ですか？」

と唯を見つめていたけど、やっぱり唯の行動が気になるんだな。」

梓「唯先輩はなんかいつもと様子が違うんですよ。いつもな

ら明るく能天気な人なのに、今日はなんか真面目で真剣に取り組ん
でいる人みたいで、別に真面目に取り組むこと良いことだと思っ
ですけど、唯先輩らしくないなと思ひまして。」

漣「実は、私も
律が集合時間に遅れたことで唯が怒つたり、歌詞や歌の順番を確認
したりする唯を妙だと思つただけで、よくよく考えてみると、私
たちも残り1年を切ったわけだし、唯も本気で目標（武道館ライブ）
にむけてがんばろうと思つたんじゃないかな？ほら、唯つて一つの
ことには熱心になるから。だから、気にすることないよ、梓。」

梓「それならいいですけど・・・」

梓は考え込んでしまった。しばらくして、車内アナウ

ンス「間もなく、米花、米花です・・・」漣「

お！そろそろだな。起きろ！唯。ムギ。そろそろ着くぞ。」

唯「うーん。漣ちゃんおはよ。」紬「あら？いつ

の間にか寝てましたわ。」律は既に起きていて漣たちの座っ

ている所にもむかい、「そろそろ着くぞ。だから、降りる準備しろ。

」と声をかけた。午前11時58分、出発してか2時間43分。5

人は米花町に到着した。

05 行方不明（前書き）

ここからは、榎本梓が登場しますので、「梓」と書かれているのが中野梓で、「梓（榎）」と書かれているのが榎本梓です。間違えな
いでください。

05 行方不明

桜が丘高校軽音楽部の5人は、列車を降りて、改札を通り、駅を出て、駅前の広場にいた。 律「うーん。やっと着いたぜ。」

唯「長かったね。りっちゃん。」 梓

「ところで、律先輩、帝丹高校はどこにあるんですか？」

律「さわちゃんにここ（米花駅）から帝丹高校までの地図を書いてもらったから、それで確認するから、ちよつと待つ・・・」

しかし、書いてもらった地図はただ線が書かれただけの簡素なものだった。

唯・律・澁・紬・梓「・・・。」 梓「あの

ー、律先輩、この地図は幼稚園児に書いてもらったんですか？」律

「いや、これは間違えなく、さわちゃんに書いてもらったんだけど。」

澁「しかし、困ったな。この地図じゃ帝丹高校がどこかわかんないな。仕方ない誰かに聞くか。」 律「

じゃ、澁、聞いてこい。」 澁「ひいー、ヤダ。」

律「なんで？」 澁「もし、聞いた人が怖い人だったら、何されるかわからないし。」

律「澁、そんなことしてたらいつまでも着かんぞ。」 澁「でも、絶対ヤダ。

絶対ヤダ。」 律「澁、いい加減にしろ！」

律と澁はケンカ寸前、とここで唯が「すみません。」と丸眼鏡をかけた、ショートカットの女性に話かけた。小林先生である。

唯「帝丹高校まで行きたいんですが、行き方がわかんなくて、行き方を教えてくださいませんか？」小林先生「帝丹高校の行き方はね、・・・。」と小林先生は丁寧に道を教え、更に、地図まで書いてくれた。

唯「ありがとうございます。」 小林先生「帝丹高校に用事がある」と言うことは、あなたたち、もしかして、今日、帝丹高校でライブを行う、桜が丘高校軽音楽部の人たち？」

澁「は、はい、

唯「ありがとうございます。」 小林先生「帝丹高校に用事がある」と言うことは、あなたたち、もしかして、今日、帝丹高校でライブを行う、桜が丘高校軽音楽部の人たち？」

そ、そうです。わ、わ、私たちき、今日、て、て、帝丹高校で、ら、ライブをお、行つ。さ、桜が丘こ、高校け、けい、軽音楽ぶ、部で、です。」

律「落ち着け、漣。」

小林先生「私はそのライブに行けるかわからないけど、がんばってね。軽音楽部のみなさん。」

唯・律・漣・紬・梓「はい、ありがとうございます。」

小林先生はその場を去った。

梓「あの人は、本当に良い人でしたね。」

律「本当だな。」

同じ眼鏡かけてても、さわちゃんよりは断然親切だし、励ましの言葉もくれたしな。よし、そろそろ行くか。」

唯・

漣・紬・梓「おー。」

5人は米花駅を後にした。

十分後

律「お腹が減って、もう歩けない。」

漣「おい！まだ歩き初めて十分ぐらいしかたってないぞ。」

律「でも、もう12時過ぎだし、昼にしようぜ。」

紬「そうね、私もちよつと。」

漣「でも、ここらへんにハン

バーガーショップもコンビニもないぞ。」

梓「あの、先輩。あ

そこに・・・」

梓が指したのは三階建ての雑居ビルの

一階にある喫茶店だった。「ポアロ」である。

律「ナ

イスだ。梓。早くいこうぜ。」

漣「おい！待て、律。」

律は一目散に「ポアロ」にむけて走った。漣も慌て律の後を追いかけた。唯・紬・梓はゆっくりしたペースで二人を追いかけた。

梓（榎）「いらっしやいませ、こちらにどうぞ。」

席に案内された五人は席に座ると早速注文をした。

注

文したもの

唯 サンドイッチ ¥360 律

オムハヤシ ¥970 漣 オムライス ¥790 紬 ナポ

リタン ¥550 梓 ラザニア ¥590 共通 コーヒ

ー ¥240 五人は食べ終わって、唯「私、トイレ行ってくる」

唯はトイレに行った。紬「あら、電話です

わ。」

紬も電話をかけるため店の外に出た。

残った律・漣・梓は唯について話始めた。

梓「

唯先輩、いくらひとつのことに集中していると言っても、やっぱりいつもと様子がおかしいですよ。」

律「確かにそうだな。太りにくい体質の唯が、漣やムギよりも食べている量が少ないしな。」

漣「律、それどうゆう意味？」

律「でも、確かに」

に梓の言う通りだな。律を怒ったのといい、列車の中で歌詞を確認しているといい、そして、食通の唯が昼食の少なさといい、やっぱり唯、いつもと様子がおかしい。」

梓「漣先輩もそう

思いますよな。」

漣「考えられるのは、他校の生徒に

唯もしくは私達軽音楽部を馬鹿にされて、むきになってるのか。」

律「唯はそんなこと気にするタイプじゃないぞ。」

漣「後、考えられるのは、唯に思い病気が

見つかって、・・・。」

とその時、

唯がトイレから戻ってきた。それと同時にムギを電話を終えて戻ってきた。

律「よし、それじゃそろそろ行くか。」

五人は席に立ちレジにむかった。

梓（榎）「お

会計は¥4460になります。」

律「んじゃ、一人¥892だ

な。」

漣「こうゆう場合は、部長のおまえが払う

んだろ。」

梓「そうですね。律先輩。」

唯「りっちゃん、よろしく。」

紬「

よろしくお願いしますわ。」

律「ったく、わかった

よ。」

梓（榎）「¥5000からお預かりします。¥540のお

釣りでです。」

五人は「アポロ」をあとにした。その後、

梓（榎）がテーブルを片付けていると、忘れ物の眼鏡を発見した。漣の眼鏡である。漣は3年生の4月頃から、近眼になり、書いているときとライブ以外のベースを弾いているときは、眼鏡をかけるようになった。梓（榎）はすぐにあの子達のものど分り、届けるためにあとを追いかけた。

一方、その頃、少年探偵団は米

花公園で、キャッチボールをして遊んでいた。しかし、コナンはキャッチボールは上の空で考え事をしていた。

コナン「し

つかし、なんで博士の先輩が桜が丘高校にいるんだ。昨日、調べたら、桜が丘高校は女子校だったし、もしかして、先輩で博士が付き合った人とか、もうわけわけんねえ。」
元太「おい！コナン。」
コナン「ん？つておわつ。」
元太「コナンちゃんとボール見てたのかよ。」
光彦「まさか、またコナン君野球をバカにしてんですか？」
コナン「んなわけねえだろう。」
歩美「ねえ、なんかのど渴かない？」

光彦「そうですね、じゃあ、あそこの自動販売機で買ってきましょうか？」
コナン「じゃあ、俺も行くよ。」

元太「俺も。」
歩美「歩美も行く。」
哀「私はパス。そんなにのど渴いていないから。」

コナン「じゃあ灰原はここにいてくれ。」
哀「わかったわ。」
四人は哀を残して、自動販売機にむかった。

一方、その頃、桜が丘高校軽音楽部の五人は丁度米花公園にさしかかろうとしていた。
律「うっ、なんか急に私トイレに行きたくなっちゃった。さっきのところでトイレ済ませればよかったな。」

梓「せ、先輩、実は私も。」
漣「トイレならあそこの公園の中に有るみたいだぞ。」

律「はー。助かった。」
漣「私もトイレ行きたくなつたし。」
紬「私も。」
唯「私はいいや。さつきトイレ済ませちゃったから。」

律「んじゃ唯は荷物見張ってくれ。」
唯「了解です。りっちゃん。」

四人は唯に荷物番頼み、トイレにむかった。

五分後

律「うーん、すっきりしたぜ。」
漣「あれ？唯は？」

そこに唯の姿はなく、代わりに唯の靴とギター（ギー太）が置いてあった。
梓「きつと唯先輩は、みんなをおどかさうとして、どっかに隠れているんですよ。」

漣「だとしても、靴はともかく、唯がギターを置いてまで、そんなことしないと思う。」
紬「もしかして、唯ちゃん誰かに誘

拐されたんじゃ。」

四人は「はつと」思った。

それと同じ頃、桜が丘高校軽音楽部の四人から少し離れたところにいた少年探偵団四人は自動販売機で飲み物を買って戻っていた。

歩美「哀ちゃん、戻ってきたよ。」

光彦「灰原さん。あれ？いませんね。」

そこに哀

の姿はなく、近くのベンチに哀の携帯が置いてあるだけだった。

唯と哀はどこへ消えたのか？そして、唯のいつもと様子が違うわけとは？

06に続く。

06 連絡（前書き）

受験のために投稿が遅れてしまい、約10ヶ月ぶりの投稿です。皆さん、投稿が遅れてしまいすみませんでした。

唯と哀が行方不明になったその頃、憂と憂の友人鈴木純は教室でお話をしていた。純はジャズ研に所属しており、本当ならもう部活に行かなければならないのだが、ジャズ研の楽器が全て点検に出されたので、休部となった。

純「はあー。梓は帝丹高校でライブか。羨ましいいな。遠くでライブ出来て。うちなんかライブはやるけど殆ど近くだから。」

憂「そうだね。純ちゃん。」

純「ところで、憂。憂のお姉ちゃんが遠くに行っちゃって心配じゃないの？」

憂「それは心配だけど、澪さんやついているし、米花町だここから遠くて、・・・ううっ、お姉ちゃん。」

憂は泣き出した。

純「ご、ごめんね。憂。」

純は憂をなだめた。丁度、その時、憂の携帯が鳴った。

憂「あつ、梓ちゃんからだ。・・・もしもし、梓ちゃん。どうしたの？えっ？お姉ちゃんが行方不明になった？」

憂は

その言葉を聴いて、頭の中が真っ白になった。純はすぐに憂から携帯をもらい梓と通話をした。

純「ちよつと待つて、梓。唯先輩が行方不明になったってどうゆうこと？」

梓「私達がトイレに行っている間に唯先輩に荷物番頼んでいて、その間にいなくなったの。だから・・・」と丁度その時、和が慌てた様子で教室に入ってきた。

和「憂、純。

今すぐ、校門の所に来て。」

和「私

達、今から米花町に行くから。」

純「でも、米花町に行く

手段が・・・」

和「さつき、山中先生に頼んで車を用意し

てもらったから。ほら、速く。時間がないから急いで。」

憂と純は、急いで校門の所に来た。そこには、一台の赤い軽自動車が止まっていて、運転席にさわ子先生、助手席に和が乗っていた。さわ子先生は和同様に慌てた様子で憂と純に言った。

さわ子「二人とも急いで!!」

憂と純は

急いで車の後部座席に乗り、さわ子先生、和、憂、純を乗せた赤い軽自動車は米花町に向けて制限速度ギリギリのスピードで出発した。何故、さわ子先生と和が唯が行方不明になったのを知ったのは、

(10分程前)

生徒会室にいた和に澪から電話

が掛かってきた。和「もしもし、澪。どうしたの?」

澪「唯が行方不明になった。」

和「澪が冗談を言

うなんて珍しいわね。」

澪「の、和。冗談じゃない。本当の

事なんだ!!!」

和は澪からそのことを聞いて

一瞬、目の前が真っ白になったが、少しして、

和「澪。私も今からそっちに行くから、私が来るまでそこを動かないで、いい?」

澪「わかった。」和は一旦電話を切り、さわ子先生がいる職員室に向かった。同じ頃、さわ子先生にも細から電話が掛かってきた。

さわ子「もしもし、ムギちゃん。何か私に用事?あつ、もしかして、私がいっつあっち到着するか知りたいのでしょ?」

さわ子先生は、本当は桜ヶ丘高校軽音楽部のみんなと行く予定だったが、当日に急な会議が入ってしまった。みんなと行くこと出来なくなってしまったのである。

さわ子「大丈夫よ。会議はたった今終わって、これからみんなのところにいくから、ライブが始まる前に向こうに着くから……」

細「先生。そのことじゃありません。実は、唯ちゃんが、唯ちゃんが、いなくなっただんです……」

細
はさわ子先生に唯がいなくなっただ経緯を述べた。その時の細は真剣だった。それによりさわ子先生は唯が行方不明になったのは、本当のことだと確信した。丁度その時、和が職員室に入ってきた。

和「先生。唯が……」

さわ子「真鍋さん。事情はさつき、琴吹さんから電話がきたからわかってる。真鍋さん、私は車をだしてくるから、平沢さん(憂)と鈴木さんに、校門のところに来てくれるように行ってくれないかしら?」

和「……はい。先生。」

和は憂と純にそのことを伝えるため、2年1組の教室に向かった。
車は高速道路に入り、どんどんスピードをあげた。

さわ子「(唯ちゃん・・・お願いだから無事でいて。)」

和「(唯・・・)」
純「(お姉ちゃん・・・)」

純「(唯先輩・・・)」

一方、その頃、警視庁捜査一課に一本の電話が入った。電話に出たのは佐藤美和子警部補である。佐藤「もしもし」
コナン「

あつ、佐藤刑事。」
佐藤「あら、コナン君、ど

うしたの、又、事件？」
コナン「うん。だか

ら、目暮警部にかわって欲しいんだけど・・・」
佐藤「目暮警

部なら今、捜査会議中でないわよ。」
コナン

「じゃあ、高木刑事に」
佐藤「高木君も張り込み

に行っていないわよ・・・コナン君、私じゃダメなの？」

コナン「ううん。佐藤刑事だと忙しそうだから。(本当は高

木刑事とかに比べると相手にしてくれそうもないからだけ。)」

佐藤「気を使ってくれてありがとうコナン君。

でも、今なら大丈夫。どこで事件が起きていらのかしら？」

律「場所は米花公園だ。」
佐藤「？」

コナン「そう。？ば、場所は米花公園。」
佐

藤「OK。今から、私と白鳥君と千葉君でそっちに行くから、そこ

を動かないでね。」
律「了解だ。」
佐藤「？」

漣「律。人の会話に割り込んでくるな。(ガチャ)・・・ツウー・・・

・ツウー。」
佐藤「一体なんだったかしら？」

白鳥「佐藤さん。さっきの電話はコナン君からですか？」

佐藤「ええ、そうよ。だから、白鳥君と千葉君も現

場に来てもらえるかしら？」
白鳥「良いですよ。」

佐藤「千葉君は？」
千葉「もちろんです。おや？佐藤さん。

よく見たらこの電話番号、コナン君の携帯の番号と違いますよ。」

佐藤「そうなのよ。千葉君。さっきから私も不思議

に思っ・・・千葉君！今はそんなことは関係ないでしょ。早く行く

わよ。」

ここで話は代

わるが、なぜコナンは自分の携帯の番号とは違う番号かけたかと言
うと、05の終わりまで戻って

紬「もしかして、唯

ちゃん。誰かに誘拐されたんじゃない？」

5人ははつと

思った。律はすぐに「いやいや、唯はきつとかくれんぼしたいんだ
よ。」と反論した。しかし、漣は、

漣「だからといってこ

こに唯の靴があるのは、変だろ。」と反論した。梓「でも、唯先
輩の靴があるからって、唯先輩が誘拐されたとは限りませんよ。も
しかしたら、この靴は唯先輩のと似ているだけで、別の人の靴で、
唯先輩は向こうの自動販売機でジュースを買いに行っただけとかか
もしれませんし。」

元太「それは、ないと思うぞ。」

律・漣・紬・梓「へっ？」

光彦「

僕達もさつき自動販売機に行きましたけど」

律「えーと、君た

ちは一体・・・」

元太「俺たち」

光彦「僕達」

歩美「私達」

元太・光彦・歩美「少年探偵団」

「律・漣・紬・梓・・・」

コ

ナン「（おい、おめえら。）」

歩美「お姉さん達も

誰かを探しているの？」

律「そうだけど。」

光彦「でした

ら、僕たちもある子を探しているんですよ。良かったら一緒に探し
てくれませんか？その代わり僕たちもお姉さん達の探している人を
探してあげます。」

律・漣・紬・梓は迷ったが、少しして漣が

「わかった」と言った。

コナン「じゃあ、まず探している人

律「

名前は平沢唯で、特徴は・・・ボブ（髪型の名前）で、右側にヘア
ピンをしていて・・・弱つたな。唯はこれ以外の特徴は思い出せな
い。」

漣「写真を見せた方が良くんじゃないか？」

梓「えっ

?! 私持ってませんよ。」

律「持っていないわけがな

いだろ。唯と梓でツーショットで撮っていたじゃないか。」

梓「あれは、唯先輩の携帯で撮ったものです！」

律「よし。」

じゃあ、漣。漣のカメラで前に軽音学部のみんなまで写真を撮っただろ。あれを見せてみる。」

漣「律。あれを撮ったのは、入学したばかりの頃だろ。他にも撮ったけど、後ろ姿だし。」

律「よし。じゃあムギ。」

なさい。私はあまり写真は撮らないから。」

（キー）どうすれば良いんだよ。」

ムギ。ビデオカメラ持っていたよな？」

い。今回忘れてきちゃったみたい。」

な時に限って忘れてどうする。」

漣「あつ！そう言えば。」

「漣は携帯を取りだしいろいろと操作を始めた。」

漣「あつた。」

和に教えてもらったんだよ。」

面を覗いた。律・紬・梓「秋山漣（公式）ファンクラブ」秋山漣（

公式）ファンクラブは桜ヶ丘高校前生徒会長の曾我部恵そがへめぐみが制作した

ホームページで、主は漣の写真だが、僅かに唯や律の写真が載って

いる。梓「確かに。これなら唯先輩の顔写真も見つ

かるますね。」

「紬「これが唯ちゃんよ。」

団のみんなに見せた。律「よし。じゃあ、次

は、君たちが探している人の名前と特徴を教えてください。」

コナン「名前は灰原哀で、ウェーブがかかっています。」

光彦「コナン君。こっちも写真を見せる方が良いんで

はないですか？」

コナン「ーっても、灰原の写真はないぞ。」

光彦「それなら、僕が持ってます。この前、キャンプに行った時

に撮った写真です。」

光彦は桜ヶ丘高校軽音楽部のみんなに写真を見せた。そして、すぐに桜ヶ丘高校軽音楽部と少年探偵

団は協力して唯と哀を探することになった。（しばらくして）

光彦「見つかりましたか？」

ただ。こっちは？」

コナン「こっちもいない。」

漣「いや。ま

律「こんだけ探してもいないなんて。」

コナン「これ以上探すとすると10人だけでは無理だから、応援を呼ぼう。歩美ちゃんは博士に、元太は蘭ねえちゃんに電話しろ。」

元太「おめえはどうすんだよ？」

コ

ナン「俺は目暮警部に電話するよ。」

光彦「でも、相手に

してくれませんか。」

コナン「その時には、高木刑事か千葉

刑事にでも頼む……って、ない。携帯電話がない。(そうか、さ

つき、博士の家に忘れてきたんだっけ。でも、どうすれば良いんだ。

探偵団バッチも置いてきた上、高木刑事とかには連絡出来ないから

な。ん？」律「ほらよ。携帯が無いんなら貸してやるよ。」コナ

ン「あ、ありがとう。」

と言うわけでコナンの

携帯電話の番号が違っていたのは、律から携帯電話を借りてかけたからである。

一方、その頃唯と哀はとある場所

に閉じ込められていた。果たして、2人は何処に閉じ込められているのか？

07に続く。

07 監禁（前書き）

久しぶりに唯と哀の登場です。

律・漣・紬・梓とコナン・歩美・元太・光彦の8人が哀と唯を捜索していた頃、哀と唯はある場所に閉じ込められていた。しかし、2人共、気絶しており、しばらくして、哀が意識を取り戻した。

哀「・・・うーん。（意識を取り戻して）はっ！？ここはどこかしら？」哀は周りを見渡した。すると、哀の隣で唯が気絶していた。その直後、唯が目を覚ました。

唯「うーん。」 哀「あなたは誰？」

唯「ほえ？」 哀「あなたは何故、ここにいるの？」

哀はもしかしたら、唯がここに閉じ込められた人の仲間で、逃げないように見張っているかもしれないと思い、警戒をした。唯は哀の威圧的な質問に戸惑ってしまった。

唯「わ、私は（オロオロ？）ひ、平沢唯で、そ、それで・・・痛っ！！」よく見たら、唯のおでこから出血していたのである。哀は唯が閉じ込めた人の仲間ではないことを確信した。それと共に、唯も自分と同様に閉じ込められた被害者であることを確信した。哀は絆創膏を持っていたので、すぐに唯の手当てをした。哀「はい、これで良くなると思うわ。」 唯「ありがとう・・・あつ、名前を聞いていなかったよ。名前は何て言うの？」

哀「私は灰原哀よ。」 唯「灰原哀ちゃんか。でも、ちょっと言いづらいな。ねえ、漢字で書くとどう書くの？」 哀「灰色の灰に、野原の原に、悲哀の哀よ。だから、哀ちゃんでも良いわ。」

唯「うーん、哀ちゃんだと、なんか悲しそうだな。そうだ、灰色は英語でグレーだから、グレちゃんが良い？」

哀「え、ええ良いわよ。（この子はかなり考えが独創的ね？）」

一方、その頃、律・漣・紬・梓とコナン・歩美・元太・光彦は、和達と佐藤刑事達に合流していた。果たして、唯と哀は無事見つかるのだろうか？ 08に続く。

律・漣・紬・梓とコナン・歩美・元太・光彦の8人は、和達と佐藤刑事達と合流していた。

歩美「あつ！佐藤刑事だ。」

佐藤「あなた達、事件のこと詳しく教えてくれないかしら？」

梓「はい。実はですね。唯先輩と灰原哀さんと言う人がですね。・
」

佐藤「あなた達は誰かしら？」

律「何を隠そう、私が桜ヶ丘高校軽音楽部の部長、田井中律だ。」

漣「わ、私は、秋山漣。」

紬「私は、琴吹紬です。」

梓「中野梓です。」

律「おや？梓。やっぱり唯のことが心配なんだな。」

梓「ち、違います。私は、た、ただ、人として当たり前のことをしただけです。」

律・漣「（素直じゃないな。）」その後、佐藤刑事達は、コナンから事件の事を聞いた。

佐藤「なるほどね。」

白鳥「しかし、弱りましたね。証拠か何かないと。」

律「証拠なら有りますわよん。」

と言つて律は白鳥警部にギ―太を渡した。

白鳥「しかし、これだけ渡されても、証拠とは……。おや？何か入ってます。これは楽譜のようだ。」

佐藤「……。白鳥君。この楽譜よく見たら、血が付いているわ。」
唯の楽譜には、まちまちではあつたが血痕が付いていた。そして、その血痕は言葉に付いていた。

【血痕が付いていた文字】わ、た、た、い、に、す、し、く、け、
律「漣。これの意味解るか？」

漣「見えない？。聞こえない？。」

律「駄目だ。こりゃ。」

コナン「とにかく。このメッセージを解読しよう。」

和「そうね。それしか、唯達にたどり着けないだろうから。」

みんなは楽譜のメッセージの解読を試みている。

しかし、すぐ近くに、謎の男がみんなを見つめている。又、別の方向からも謎の男女がやはりみんなを見つめている。

その頃、

唯「はなしてよ。」

哀「あなた達一体何をやる気なの？」

犯人A「あ？んなこと。お前らを殺すに決まってるだろ。」

犯人B「俺達の顔既に見られてるからな。」

犯人A「だから、生きて帰れると思うなよ。」

唯・哀「・・・」

唯と哀に何があったのか？又、みんなを見つめている謎の人物の正体は？

09に続く。

09 唯と哀（前書き）

話は少しさかのぼって、唯と哀が行方不明になってから、犯人に捕らえられるまでの話です。

09 唯と哀

(04まで戻って)

律達がトイレに行ってる間、唯は楽譜（ふわふわ時間）を見ていた。一方、哀は携帯でファッションのサイトを閲覧していた。

しかし、その影に、

犯人A「おい。あいつなら良さそうじゃねえか？」

犯人B「ああ。あいつは良さそうだ。」

犯人は哀を狙おうとしている。更に犯人はこんな危険な発言までした。

犯人A「あいつからまず金を抜き取るぞ。」

犯人B「ああ、そして、たっぷり苛めてやるぞ。」

犯人A・犯人B「そして、最後に殺害だ。」

犯人A「殺す時に聞こえる悲鳴が聞けるなんて、楽しみだ。」

何が楽しみだ？人を苛めておきながら、最後は殺害なんて、最低なやつらだ。某高校の生徒会のS・DとI・Gにぼこぼこやられて欲しいぐらいだ。

犯人A「よし。そろそろ行くぞ。」

犯人B「おう。」

そう言うと、犯人はクロロフィルを染み込ませた布を持ち、そして、

哀「うぐ。うつつ」

哀の口にその布を当てた。

哀「うつつうつつう、うつつう、うつつう……うつつ……」

哀の意識は遠のいていく

哀「うつつ……う……う……」

哀は完全に気を失った。

犯人A「ばっちりだ。」

犯人B「ああ。」

その後、犯人は気を失った哀を持ち上げ、トラックを乗せた。しかし、その光景を唯が見ていた。

唯「あれ？あの人達、さっき、女の子を荷台に放り投げたような？それに、女の子もぐったりしていたような？気のせいかな？……いや、気のせいじゃない。やっぱり女の子に何かあったんだ。助けなくちゃ。」

唯はトラックに近づいた。

唯「（え〜と。女の子は？あつ。発見。放り投げるなんて、可哀想に。よしよし。今私が助けてあげる。」

唯は前屈みになり、腕を伸ばした。

唯「（も、もう少し……）」

しかし、その時、

ポコッ

唯は倒れた。犯人によって殴られるのである。

犯人A「なんだこいつ？」

犯人B「おい。どうした？」

犯人A「あ？ああ。俺らのトラックに中坊が乗り込もうとしたんみたいだ。」犯人B「ったく。油断もすきもありやしねえな。」

犯人A「おい。こいつどうする？」

犯人B「邪魔だからどっかにぶん投げろ。」

犯人A「了解。ほら、どっか行けよ。中坊なんかに興味はねえから。」

犯人は唯を蹴飛ばした。

犯人B「おい。そろそろずらかるぞ。」

犯人A「ああ。」

犯人はトラックに乗り込んだ。

唯「（……うっ。）」

唯は気がついた。

唯は哀とは、違い、顔をバットで殴られただけなので、比較的速く気がついた。

唯「(はっ。まずい。あの人達が行ってしまう。)」

しかし、奇跡がおきた。トラックがエンストしたのである。

犯人B「おい。どうした？」

犯人A「トラックのバカが狂ったみたいだ。」

犯人B「仕方ない。直すぞ。」

犯人A「了解。」

犯人は一旦、トラックを降りた。

唯「(よおし。このすきに。)」

唯はバットで殴られた時の血を楽譜につけた。そして、楽譜をギターケースに入れて、ギターケースを閉めた。

(ギターケースを閉めない方が律達に気づかれそうだが、あの時は急いでいて、意識していなかったのであろう。)

そして、唯は再びトラックにむかった。

しかし唯はさつき殴られたことで意識が朦朧とし始め、トラックに着いた頃には、半分ぐらいしか意識はなかった。

唯「(・・・待っててね。今、助けてあげるから。)」

唯はトラックに乗り込んだ。

唯「(・・・ダメだ。意識が遠退いていく。・・・もう限界・・・)」

唯も気を失った。その直後、

犯人A「よし。やっとトラックのバカが動いた。」

犯人B「じゃあ出発だ。」

犯人は再びトラックに乗り込み、トラックを出発させた。

そこから 07の話に続くのである。

~~~~~

( 07の後 )

トラックはとある閉鎖された工場に停まった。

そして、犯人はトラックを降りた。

犯人B「さあて、あいつを苛めてやるか。」

犯人A「OK。ん？」

唯「!?!」

哀「!?!」

犯人A「あ?なんでさっきの中坊がいるんだよ?」

犯人B「さっき追っ払ったんじゃねえのか?」犯人A「知らねーよ。それよりこいつはどうすんだ?」

犯人B「面倒だ。中坊も連れてけ。」

唯「(むー。私中坊じゃないよ。高校生だよ。)」

犯人は唯と哀を連れて、工場の中に入った。そして、中でも犯人は二人に対して乱暴だった。

哀「ちよつと、押さないでよ。」

犯人A「あ?てめえらがさっさと歩かないからいけねえんだ、よ。」  
ボン

唯「痛いよ。?」

特に唯に対してはひどく、膝を蹴ったり、足を踏んだりした。

唯「はなしてよ。」

哀「あなた達、一体何をやる気なの?」

犯人A「あ?んなこと。お前らを殺すに決まってるだろ。」

犯人B「俺達の顔既に見られているからな。」

犯人A「だから、生きて帰れるなんて思うなよ。」

唯・哀「.....」

犯人B「おい。弾一発しかねえぞ。」

犯人A「しゃーねえ。あの中坊は予定外だから、あそこに閉じ込めるぞ。それでも、殺したのと同じになるからな。」

犯人B「OK。」

犯人は工場内の部屋の扉を開けた。

犯人B「さあ、ここがお前の墓場だ。早く入りな。」

唯「いやだよ。はなしてよ。」

犯人A「うるせーよ。さっさと行け。」

唯「いやだ。いやだ。」

唯は抵抗をした。そのため犯人は、

犯人A「ごちゃごちゃうるせーよ。さっさと行け。」

と言い、犯人は唯をおもいつき蹴っ飛ばし、部屋に閉じ込めた。

犯人A「ふう。やっと中坊が片付いた。あつ、やばつ。中坊の財布と携帯奪う忘れてた。」

犯人B「ほつとけよ。財布にろくな金ないだろうし、携帯もあんなところじゃ圏外だろうから。」

犯人と哀はそのまま工場の奥に行ってしまった。

唯「……………」

唯も蹴られたショックで再び気を失っている。

唯と哀のピンチである。

果たして、唯と哀は無事みんなのところに戻れるだろうか？

10に続く。

## 10 メッセージ

誘拐犯により、古い廃工場に閉じ込められ、突き飛ばされた唯。しかし、しばらくして、意識を取り戻した。

唯「・・・うつ、・・・うつ、（ハツ）。グレちゃんは？ そうか。あの人達に・・・どうしよう？ そうだ！？ 携帯で湊ちゃん達に連絡すれば、良いんだ。」

唯は携帯に取り出した。しかし、ここでは携帯は圏外だった。

唯「あれ、アンテナが立ってない。どうしよう？ どうしよう？」

唯は急いでアンテナがある場所を探した。携帯のアンテナは、窓のあるところで、ようやく、一本立った。

唯「ハア、ハア、ハア。やっと一本立った。しかし、他は立ちそうにないよね。よし、ここで、メールを打とう。」

唯はメールを打ち始めた。

ピッ

ピッ

ピッ

ピッ

唯「よし、送信と。」

メールを送信した。

一方、律達とコナン達は、

湊「うーん。」

律「うーん。」

梓「さっぱり、解りませんね。」

光彦「僕もです。頭脳をフル回転してもさっぱりです。」

元太「モタモタしていると、灰原殺られるぞ。」

博士「コレ！縁起でもないことを言うじゃない。」

コナン「そうだぞ、元太。口で言ったことは、本当になることもあ

るんだからな。」  
歩美「元太くん、酷い。」  
光彦「最低です。」  
元太「わ、悪かったよ。」  
和「まあ、まあ。」  
律「おつ、唯からメールだ。」

#### メール内容

田井中律  
助けて。

私は、今、廃工場にいるの。誘拐犯によって、グレちゃんと連れてこられたの。助けて。

このメールは律だけではなく、漣、紬、梓、憂、和、さわ子先生にも送信された。

律「つまり」

漣「これで」

梓「唯先輩が」

和「誘拐されたことが」

コナン「確定したわけだ。」

紬「・・・唯ちゃん・・・」

憂「お姉ちゃん・・・」

周辺に緊張の空気が漂っていた。

蘭「・・・」

佐藤「・・・」

純「・・・」

博士「・・・」

白鳥「・・・」

千葉「・・・黙ってても、仕方がありません。誘拐事件が起きた以上、解決していくのが刑事の役目です。」

佐藤「それもそうね。」白鳥「しかし、血の付いた楽譜だけでは、・・・」

漣「もうひとつ、あります。唯が今いる場所は廃工場と言う手がかりが、」

博士「しかし、廃工場だけじゃ、どこかわからんのう。」

紬「りっちゃん。唯ちゃんにメール送って、他に何か手がかりが見つかるとも知れないから。」

律「了解。」

梓「あ、後、楽譜についても聞いて見てください。」

律はメールを打ち始めた。

メール内容

平沢唯

聞きたい事がある

何か他に、目印になるものが無いか？後、楽譜のメッセージって何？

ピッ

ピッ

律「送信と」

メール送信

~~~~~

唯「あつ、りっちゃんからメールだ。何々？他に手がかりが欲しい？後、楽譜の意味って何？」唯は考えこんでしまった。

唯「うーん。手がかりと言われても・・・」

ここは、廃工場の一室であり、目印となるものは置かれていない。窓もメールを送信した場所一ヶ所のみであり、大きさも唯の顔がよ

うやく出せるぐらいの大きさしかない。

唯「しょうがない。とにかく窓を見よう。」

唯は、窓を見ようとした。しかし、地面から窓枠までの高さは、170CM、しかし、唯の身長は156CM、14CMも違うのである。

唯「えい、とお、えい、とお」

唯は必死で窓枠をつかもうとする。

唯「えい。やったー。」

唯はようやく窓枠をつかんだ。

唯「よいしょと。」

唯は周りを見渡した。

唯「うーん。周りは駐車場や公園だけで、何もないや。道路からも黒い車とバスが通っただけで、他には、・・・おっとと、とと、とと、とと。」

うわ・・・ドスン。」

唯は窓枠からコケて落ちた。

唯「えーん。？コケてたよ。何もないや。」唯は泣き出した。

唯「うう？・・・ハッ、こんなことしている場合じゃなかった。り

っちゃんに速くメールを送らないと。」

唯は携帯を取り出した。

ピンポンパンポン

唯「ん？」

遠くからアナウンス音が聞こえた。

唯「今のアナウンスは何だったんだろう？それに何か焦げた臭いがある。・・・そうだ、そのことをりっちゃん達にメールで送ろう。」

ピッ

ピッ

唯「メール送信と。」

メール送信

~~~~~

律「ん？お！唯から返信だ。」  
澪「返信はなんて？」

#### メール内容

田井中律

秋山澪

琴吹紬

中野梓

真鍋和

平沢憂

手がかかり

? 周りには、駐車場や公園だけだよ。

? 時々、工場前の道路を黒い車やバスが通るよ。

? 遠くから、微かにピンポンパンポンって言うアナウンスが聞こえたよ。

? 少しだけど、何かを焼いた臭いがしたよ。

後、追伸何だけど、楽譜には、何か重要なことを伝えようとしたと思っただけど、思い出せない。

律「唯、楽譜のこと思い出せないとき。」

澪「これで手がかかりは乏しくなった。」

梓「新たに、4つの手がかかりを獲得しましたが、これだけでは・・・

「????」「いえ、これで解りましたよ。」

一同「？」

????「二人はきつとあそこにいます。」

この????の正体は？

そして、唯と哀の居る場所は？

11へ続く。

## 10 メッセージ（後書き）

???は 08で律達を監視していた謎の人物です。

「????」きつと二人はあそこにいます。」

コナン「誰だ!? テメエは?」

「????」名乗る程の人物ではないですよ。私は工藤優作と言う、ただの小説家ですから。」

「そう、????の人物の正体は工藤優作だったのである。」

有希子「そして、優作の妻をしています。元女優の有希子です。」

律「工藤優作って、誰?」

「ボコッ」

律「いてー。」

「全く。優作さんぐらい常識だろうが。」

律「知らねーよ。?」

「優作さんは、「闇のナイトバロン」などのミステリー作家で、日本は勿論、海外でも名が通るぐらい有名な方なの。」

律「へえ〜」

梓「有希子さんも大女優ですよ。」

有希子「正確には元女優だけだね。」

律「へえ〜」

「全く。律はそうゆうのには関心がないよな。」

律「別に良いだろ。それより、唯とえつと〜」

歩美「哀ちゃん!」

律「そう。その哀ちゃんって言う子の居場所が解ったって、本当なのか?」

優作「ええ。簡単に解りましたよ。」

律「で、どこに居るんだ?」

優作「火葬場近くの工場ですよ。」

一同「????」

一同は理解出来なかった。

博士「どうして火葬場の近くと解るんじや？」

優作「2つ目の文章を見てください。」

律「2つ目には、黒い車とバスが通るとしか書いてないけど、」

優作「考えてみてください。黒い車と言えばなんですか？」

漣「ハイヤーだろ。」

律「リムジンじゃね？」

梓「後は、霊柩車です・・・」

一同「あっ!!」

優作「そうです。黒い車は霊柩車、そして、バスは親族の送迎用のバスですよ。」

律「異議あり。黒い車だったって、霊柩車とは限らないだろ。ハイヤーやリムジンと普通バスで、空港かホテルに向かったかもし知れないし。」

佐藤「この近くには、空港もあるけど、飛べるのは、セスナみたいな小型機ぐらいで、リムジンが来るような巨大空港ではないわよ。」

小林「第一、空港まで行くバスは走ってませんよ。」

少年探偵団「小林先生。」

光彦「どうしてここに？」

小林「さつき、阿笠さんから灰原さんが行方不明になった連絡があり、担任としてこれはほっとけないからね。」

謎の男「それは、ワシも同じ意見だ。」

一同「？」

優作、有希子夫妻の反対側にいた、謎の男（08より）が声をかけた。謎の男は眼鏡をかけ、白髪であった。

梓「誰ですか？この人」

さわ子「校長!!」

律・漣・紬・梓・憂・純「こ、校長!?!」

謎の男の正体は桜ヶ丘高等学校の校長であった。

漣「こ、校長先生が、ど、どうしてここへ？」

校長「うちの生徒が行方不明になったと聞いて、ワシも黙っている

わけにもいかないからな。」

和「でも、校長先生には、学校のことが・・・」

校長「それは、全て教頭に任せました。」

和「・・・」

優作「さあ、本題に戻りましょう。なぜ、火葬場の近くと言うことが解るかと言うと、3つ目の文章と4つ目の文章を読んでみてください。」

梓「3つ目は、僅かにアナウンスが聞こえると書いてます。」

光彦「4つ目は、何かを焼いた臭いがすると書いてますけど」

優作「恐らく、アナウンスはご収骨の案内。何かを焼いた臭いは焼かれた人間の臭いでしょう。」

律「異議あり。」

漣「何だ？律。」

律「アナウンスと臭いだけじゃ、他に場所があるじゃんか。」

漣「例えば、何処だ？」

律「さつき、私が言ったホテルもそうだし、後は、デパートとは病院とか」

漣「ホテルはアナウンスは流れないぞ。利用客に迷惑がかかるから。」

律「（パツ）あつ、そうか。」梓「デパートだって、そうです。デパートは、町の中心地が殆どですよ。1つ目文章から解るようにですな、駐車場と公園しか周辺にないデパートなんて聞いたことがあります。」

紬「それがあるのよ。梓ちゃん。」

梓「そ、そうなんですか!？」

紬「郊外のショッピングセンターなんかは、ショッピングセンター内にお店がたくさんあるから、駐車場と公園しかないとこもあるのよ。」

漣「でも、ムギ。そうゆうところって、ひっきりなしに車が来るだろう。黒い車とバスだけしか来ないのは、」

紬「うつかりしてたわ。てへ？」

律「じゃ、じゃあ、病院はどうだ？待ち合いのアナウンスは流れるし、駐車場や公園もあるし、料理も出るし……」

漣「なんで料理が関係あるんだよ？」

律「だって、何かを焼いた臭いがするってメールに、」

梓「もし、食べ物の臭いなら、「何か香ばしい臭いがするよ。」とか、「何か美味しい臭いがするよ。」って書くと思いますけど？」

律「それもそうだな。」

漣「それに、病院なら、何か焼いた臭いよりも、薬の臭いの方がすると思うぞ。」

律「……」

博士「つまり、2人は火葬場近くにいるんじゃない。」

コナン「（だから、そう言ってるじゃねえか。博士ボケてきたんじゃないーか？）」

佐藤「千葉君、私の車から地図を持ってきて」

千葉「はい。」

（3分後）

千葉「持ってきました。」佐藤は地図を開いた。

コナン「この近くの火葬場は3ヶ所。米花町火葬場、杯戸火葬場、緑台斎場。」

白鳥「確か、緑台は火葬炉の故障で、休止しているから、可能性があるのは、2ヶ所ですね。」

歩美「でも、どっち何だろう？」

光彦「決まっていますよ。廃工場が付近にあるほうですよ。」

コナン「米花も杯戸もどっちも近くに、廃工場がある。」

元太「じゃあ、公園と駐車場があるほうじゃないのか？」

コナン「これも両方にある。」

蘭「もしかしたら、火葬場の職員に聞けば時間とか解るのではないですか？」

佐藤「それもそうね。じゃあ、火葬場に電話してみるね。ちょっと

待ってね。」

プルルル〜 プルルル〜

佐藤「あっ、もしもし米花火葬場ですか？私……」

漣「うう、地図がボヤけてよく見えない。」

律「漣。眼鏡かける。」

漣「言われなくても解って……あれ？ない。眼鏡がない。」

律・絀・梓「え……ええ〜」

佐藤「しっ、静かにして、電話中だから。」

漣「す、すみません。」

梓「怒られましたね。」

律「しょうがないよ。電話中だったんだから。それより、漣の眼鏡

どうすんだ？」

梓「多分、喫茶店で落としたと思いますから〜」

絀「喫茶店まで戻るのが一番良いと思うんだけど〜」

律「けど、今もどつたら、変に思われないか？」

梓「それもそうですね。」

漣「だから、眼鏡は諦める。」絀「漣ちゃん良いの？」

漣「ああ、眼鏡は又、買い直せば良いし、それに今は唯のことが優

先だ。」

律「漣。」

梓「漣先輩。」

絀「なんか素敵。」

梓（榎）「あの、すみません。」

漣「はい。」

梓（榎）「さっき、喫茶店にいませんでしたか？」

梓「はい。いましたけど。」

梓（榎）「そこでこの眼鏡を落としましたか？」

漣「それ、私のです。」

梓（榎）「はい、どうぞ。」

漣「ありがとうございます。」

律「良かったな。漣。」

漣「ああ。」

梓（榎）「じゃあ、私はこれで戻りますね。仕事がありますから。」  
律・漣・紬・梓「ありがとうございます。」梓（榎）は仕事場に戻った。

佐藤「みんな。火葬場の場所が解ったわ。」

和「本当ですか!？」

佐藤「電話して解ったんだけど、米花は今日は火葬は午前中のみだったらしいわ。」

白鳥「つまり、2人の居場所は杯戸火葬場の近くですね。」

コナン「よし、これで6ヶ所に絞れた。小木製紙、矢作加工、関口水産、三宅パン、蛭原電器、宮迫製麺だ。」

唯と哀が閉じ込められている可能性がある場所

? 小木製紙

? 矢作加工

? 関口水産

? 三宅パン

? 蛭原電器

? 宮迫製麺

果たして唯と哀はどこに居るのだろうか?

~~~~~

パン

哀「痛い。何すんのよ?」

誘拐犯A「お前を苛めてんだ。」誘拐犯B「ほらほら。もっと苛めてやるぞ。」

パン

パン

パン

パン

パン

哀「痛い。」

誘拐犯B「ウケケケ。」

12へ続く

11 推理（後書き）

校長が事件を知るまで

校長「さわ子先生。急いでどうしたんですか？」

さわ子「あ、校長先生。実はうちの生徒がゆ、行方不明になったんです。」

校長「行方不明ですと」

さわ子「では、急いでますんで」

さわ子先生は走り去った。

校長「教頭先生」

教頭「何ですか？校長。」

校長「我が校の生徒が行方不明になった。行方不明者が出た以上ワシも黙っていられません。ワシも捜索に行きます。後の学校のこと
は教頭先生、あなたに任せます。」

堀米「それは困ります。」

山本「これから、N女子大学の校長がいらつしゃいます。」

教頭「なので、校長居ないと困りま・・・あ、逃げたしました。」

堀米「校長」

山本「校長」

校長はそのまま走り去り、車を走らせ、澁達に合流したのである。

12 場所特定(前書き)

久しぶりの投稿です。今回は、場所がついに解ります。

12 場所特定

唯「ハア、どうやって逃げよう。逃げて、グレちゃんを助けないといけないし、そろそろ戻らないと澁ちゃん達も心配してるだろうから。」

唯は、ここから、脱出することを考えていた。

唯「あの窓から逃げられないかな？」

唯は、先程、律達にメールを送った窓から逃げようと思ったのである。

唯「よいしょつと。」

唯は窓に登った。

唯「・・・ダメだ。これは、」

窓から地上までは、5Mの差があり、落ちたら、命の保障が無いぐらいの高さのうえ、そんな高さから落ちたら、音で犯人に気づかれる危険性もあった。

唯「どうしよう？」

唯は落ち込んでしまった。

唯「ん？」

その時、唯は何かを発見した。

~~~~~

律「で、6つの工場のうちどれなんだ？」

一方、律達とコナン達は、哀と唯の居場所を探していた。

光彦「絞れたとはいっても、まだ候補地が6つもありますからね。」

白鳥「いや、4つになったよ。三宅パンは、お菓子を作るために、昨日から再開してるって、情報があるし、小木製紙は、今、解体中で、この時間は作業員がいるからね。」

コナン「(でも、まだ、4カ所もあるんじゃ、2人の居場所は特定出来ない。よし、こうなったら)ねえ、律さん、澁さん。」

律「ん？」

漣「何だ？」

コナン「唯さんって、どうゆう性格なの？」

漣「そうゆうことは、憂ちゃんに聞いた方が良いと思うが・・・、  
そうだな、唯の性格は、やっぱり天然かな？」

律「後は、子供っぽいとか」

和「後は、いくら食べても太らないとか、」

憂「いつも温かい所かな？」

梓「一つことを覚えたら、他のことは、みんな忘れる所ですね。」

漣「1つのことを集中したら、その事を最後までやり遂げる所もそうだな。」

律「まあ、でも、やっぱり」

梓「唯先輩の」

紬「一番の性格は、」

漣「食べ物に敏感で、どんなに遠くにいても、食べ物の匂いをかぎ分けることだな。」

コナン「・・・ピシッ（そうか）」

コナンは、もう一度、地図と哀と唯が閉じ込められている可能性がある場所を確認した。

コナン「（よし、2人の居場所が解ったぞ。）」

歩美「コナン君。どうしたの？」

コナン「僕、犯人解っちゃった。」

和「それは、本当なの!？」

博士「で、どこなんじゃ？」

コナン「ねえ、律さん。もう一度、唯の一番の性格を言ってみて。」

律「だから、唯は、食べ物に敏感で、どんなに遠くにいても、食べ物  
の匂いをかぎ分けることだって言ったじゃねーか。」

コナン「後、白鳥刑事。もう一度、2人が閉じ込められている可能性  
がある場所を言ってみて。」

白鳥「えーと、閉じ込められている可能性がある場所は、矢作加工、  
関口水産、蛭原電器、宮迫製麺の4カ所だけど、コナン君。」

コナン「これで、もう解るよね。」律「えーと、唯、性格、食べ物、関口水産、矢作加工・、電器・、製麺・、そうか、解ったぜ。」

漣「私もだ。」

紬「私もよ。」

梓「私もです。」

憂「私も、お姉ちゃんの居場所解った。」

和「何処なの？」

律「なんだ、和。まだ解らないのか？」

憂「和さん。加工と水産と製麺で連想する物を言ってみて。」

和「そうね、その3つだと、連想するのは、食べ物・、そうゆうことね。」

律「そうだせ。唯は食べ物に敏感。もし、その3つのどれかに閉じ込められているなら、唯ならまず食べ物の話題を出すぜ。」

漣「その話題がメールにはないと言うことは？」

梓「唯一、食べ物とは関係ない」

律・漣・紬・梓「蛍原電器が2人がいる場所(だぜ/だ/なの/です)。」

律「よし、そうと解れば、早速、蛍原電器に乗り込もうぜ。」

佐藤「ちよつと待つて。」

律「何？」

佐藤「こんな大勢で言ったら、犯人に気づかれてしまうわ。それに、ここからだ、蛍原電器まで10KM以上離れているわ。」

律「車使えば良いんじゃないね。」

佐藤「車は、3台(さわ子先生の車、博士の車、佐藤警部補の車)しかないのよ。それに対して、ここには、20人以上がいるのよ。」

紬「それなら、心配ありません。」

一同「？」

丁度、その時、一台、高級車がやってきた。

斉藤「これで、宜しいですか？紬お嬢様。」

紬「ありがとう、斉藤。」その高級車を運転していたのは、琴吹家

執事の斉藤である。

千葉「一体、これは、どうしたんですか？」

紬「役に立つかなって思って、さっき、連絡したの。」

佐藤「でも、これなら、犯人に怪しまれずに近づけそうね。」

紬「でも、ごめんなさい。この車は運転手を含めて8人しか乗れないの。」

佐藤「なら、そこにいくのは、私とコナン君、蘭ちゃん。それに、千葉君。律さんと紬さんと憂さんね。白鳥君は、犯人について、調べてくれない。」

白鳥「解りました。」

コナン「じゃあ、俺は、行くからな。」

元太「コナンばかりずるいぞ。といつもなら言うが、今回は仕方ない。」

光彦「その代わり、灰原さんを無事に連れ戻してくださいよ。」

歩美「きつとだよ。」

コナン「解ってるさ。」

律「じゃあ、私達もそろそろ行くな。漣と梓はここで待機してくれ。」

漣「解った。」

梓「無事に、唯先輩を連れ戻してくださいよ。」

律「解ってるって、」

こうして、8人を乗せた、高級車は、蛭原電器へ向かった。

~~~~~

ドン

ドン

ドン

ドン

唯「ハア、ハア、全然ダメだ。ビクともしない。」

唯はドアに体当たりをしていた。

実は、先程、唯が発見したのは、犯人に突き飛ばされ、入ったドア

であり、ここを壊せば、脱出出来るのでは、ないかと唯は考えた。しかし、ドアの前には、階段があり、助走がつかず、又、ドアは錆びてはいたが頑丈な作りであり、唯が体当たりしてもビクともしなかった。おまけに、唯は何度も体当たりした為か、体のあちこちが傷だらけになり、出血までしていた。

唯「どうしよう？」

~~~~~

哀「・・・」

犯人A「かなり弱ってきたな。」

犯人B「よし、止めだ。」

哀は大ピンチである。果たして律達とコナン達は間に合うのか？

13へ続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1260j/>

---

名探偵コナン「帝丹高校ライブ事件」

2011年12月16日01時45分発行